

新・下野市風土記

新しい資料館を目指して



下野市教育委員会 文化財課

4月号で、令和3年春に、しもつけ風土記の丘資料館のリニューアルが予定されていることや、全国の風土記の丘資料館、特に県内の3館の風土記の丘資料館について記しました。

今回は、どのようにして約40年前、現在の地にしもつけ風土記の丘資料館が建設されたのか、その経緯について少しだけ触れてみます。

県立博物館誘致の夢

平成11（1999）年度、旧国分寺町では町史編さん事業が行われていました。その際、行政文書の中から、筆で記された1通の書類が発見されました。

書類は、昭和51（1976）年4月26日付で、文末には署名と共に多数の公印が押され、見出しには「県立博物館誘致についての陳情書」と記されていました。

県立博物館誘致の要望書でした。



当時の市長、町長、議長、教育長の署名が並ぶ、陳情書の一部（国分寺町史図説編に掲載）

要望書と共に、昭和39（1964）年に下野国分尼寺跡が発見されたこと、県立博物館の建設計画が進められていることなどが記された、当時の広報記事も同封されていました。手書きの地図も添付されており、摩利支天塚古墳・琵琶塚古墳（小山市）や吾妻古墳・車塚古墳（壬生町）、愛宕塚古墳・丸塚古墳（国分寺町）などの古墳と、発見されたばかりの下野国分尼寺跡、大正10（1921）年3月に国の史跡指定を受けた下野国分寺跡と下野薬師寺跡が記されていました。

要望書には「これらの遺跡や史跡が多く点在するこの地域は、全国でも屈指の文化財が継承されてきた地域であり、県立博物館設置に最も適した地」と記されており、まさに天平13（741）年の「国分寺建立の詔」のようです。

県立博物館の誘致は叶いませんでしたが、この陳情活動が後に実を結び、しもつけ風土記の丘資料館が現在の地に建設されることにつながりました。

先人たちの意志を継ぐ

この後、全国でも異例の、同一県内で2か所目の風土記の丘として、平成4（1992）年に、なす風土記の丘が設置されます。

なす風土記の丘資料館が設置された湯津上（大田原市）には、元禄5（1692）年、日本で初めての学術的な発掘調査が行われた上侍塚古墳と下侍塚古墳があります。

この発掘調査は、「水戸黄門」でおなじみの黄門さまこと水戸光圀が、本紀73巻、列伝170巻にも及ぶ紀伝体の史書「大日本史」の編さんにあたり、那須国造碑を調べる一環として行いました。

光圀は、調査を担当した佐々宗淳（「水戸黄門」の助さんこと佐々木助三郎のモデル）に命じ、出土品を絵図に記録、保存しただけでなく、発掘調査を行った古墳に松の植林をして、遺構の保護まで行いました。これは、現在の文化財保護の観点からも、理想的な手順ということができ、大田原市は近年「日本考古学発祥の地」としての活発なPRを進めています。

このように、栃木県では、江戸時代から文化財の保護が行われ、50年以上前の先人たちにより、すでに行政の枠組みを超えた広域での文化財活用が計画されていました。栃木県だけでなく日本の考古学を語るうえで外せない重要な史跡が点在する地域として、50年前の陳情書に記された趣旨を受け継ぎ、文化財の保護と活用を進めることが、新しい資料館の大きな目標です。